

ライフスタイル

ローカルシティ・リビングのすすめ

疲弊した地方都市の現状から、さらに大都市に人が集中するとの見方が多い。しかし、最近訪れた日本や世界の地方都市をみると、こつとした懸念は杞憂(きゆう)に終わると感じている。先月、南イタリアのアマルフィを訪ねたのも、人口が5100人しかない小さな町になぜ世界から多くの人が押し寄せるのか、という答えを探しだした。

アマルフィで得心したのは、風景だけでなく資源、財源、資産を意味する「リソース」を大事に、そして有効に生かすことだ。「リソースを生かす」その最たるものが、断崖絶壁の限られた土地に作られた着色料、保存料を

一切使用しないレモン。周りに広場やレストラン、土産店が作られ、路地裏づく。古い修道院はホテルに替わり、街の付加価値を上げる。レモン・ビスコッティ、デザートはレモンクリーム、ケーキを食べ、食後に酒に産地のレモン・チェッコをたしなむといった地域ならではの特別な食体験ができる。

衰退した街、若者が再生

旧市街地では大聖堂の

価値が上がることで、雇用が生まれ地域が活性化し、若者も集まる。小さな町でもリソースを大切にして深めていくと、大きな宝物になると教えられた。

2011年の東日本大震災当日、私は甲府市にいた。地元新聞社からの依頼でイオンモール甲府

探訪 新ライフスタイル



甲府の街なかで化学反応を起こした寺崎COFFEE。既に中心部の疲弊はかなりの重症で、直近に完成した商業施設「ココリ」も行き詰まっていた。元来県庁所在地には官庁街や大学、金融機関、新聞社など地域を代表する企業や団体、オフィスなどやイタリーの若者がリノベーションをして起業する「ローカルシティ・リビング」が覚醒していた。古いビルの1階で、レトロ感を醸し出す小さな

昭和の内覧会取材した日、中心市街地にどう影響を及ぼすのか、中心部はどの方向に向かえばいいのかを掲載する目的だった。

中心部に新たな化学反応が起きていた。それは中心市街地活性化策や地域創生といった大上段に振りかざした施策ではな

（商い創造研究所代表 松本大地）